

底 で

法学部 法律学科4年 金沢 英美

冬の近い日、数えて五時を回る頃

足音を聞いて女は走った、根元が腐る床をはだしで踏んで
握る包丁もそのままに、すこし胸を鳴らして戸を開けた

人は何か名の貼りついた空かごを

降ろすことも背負いなおすことも出来ず

ただ先無く闇へ下つていく階段を、死ぬまで引きずり降りていくが

女の剥けた裸足の裏も、同様赤黒い液体で濡れ

空かごの重さですぬまで埋まり、

一人で、下つていく列にいた

帰るとも知らぬ無頼を待つて

とぼとぼ下つていく列にいた

町へ帰った男はいま、煙草屋の角を曲がろうとしていた

過ぎる今日ではもう日が落ちる、風が冬の臭いへ映りこむ

西日もなく、魔も行き過ぎた薄い暮れ

男はその年になるまで、買ったこともないばらを抱えていた

日が過ぎる日が落ちる

男の影も足の裏から消えていく

空は重さで落ちていく

真つ赤なばらは夕方終わる

知らず濃い青に染んでいく

電灯もとぎれ、田舎道でついに

ばらは姿も失った

男は気にする様子もなく、ただ前を見ながら歩いている

女が、別れる時にすこしだけ

濡らしたまつげを思い出し

重さで落ちた涙の色に

辺りも染まる誰そ彼、行き過ぎる影の群集を抜け
暮れを歩く、砂を踏む

背にした電灯がしばたいて、影が針のように回り込む

もう三つかどを曲がれば家が見え、きっと戸に手をかけるだろう

男は電灯の下に差しかかる、いやに明るい電灯は

他よりそこだけしらじらと

砂利石一つまでこうこうと

時折まばたきちらちらと
残らず足跡を消している

光の中へ男が行くと、拍子にばらは色を戻した

黒く溶けていたばらは赤く、女の思う男のために色づいた

男の汚れた上着の脇でばらは赤く、夜に揺られて浮かんでいる

闇を見据えて男は歩く、男は、ばらを抱えて前を見て

女の顔を思い出した

女は男の姿を見つめ、一度目を見開くと
三度も四度もまばたいて、それから思わず走りだすが
底の剥げ反るサンダルが脱げ、足がもつれて平衡なくし
瞬時世界が空を切る

女は転ぶと思ったが、男はその腕を強く掴み
夜の底から引き抜いた

男が歩くと花が散る、光の中へ跡と散る

驚く顔を思い出し、喜ぶ顔を思い出し

花びらは散り、足跡は過ぎ

案する顔を思い出し、涙の顔を思い出し

記憶に女を積み上げ歩くと

赤い点がひとつ、靴跡がひとつ

男の背から灯かりが消えて、電灯の背も夜に過ぎ

やがて二たび闇へ、男とばらは消えていく

かどを一つ、汚れた川と

かどを一つ、欠けた堀を

曲がつて男は、顔をあげた

男が咄嗟に夜を抜け、女を底から引き抜いたせいで
ばらは砂利へと投げ出されたが
夜の中でも、ばらは赤く

赤い、

赤いばらのまま、

それは、

先の訪問が押し売りで、がっかりしていた女がいま
新しい足音に顔を向けるのと

全く同じいつときであつた

二人の傍に、転がつていた